

第1回 仙台市総合計画審議会都市の魅力部会議事概要

この議事概要は、事務局の責任においてとりまとめた速報であり、事後に修正する可能性があります。なお、正式な議事録については、別途ホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

日 時	平成22年7月13日（火） 18：30～20：30
会 場	せんだいメディアテーク 1階 オープンスクエア
出席委員	阿部初子委員、石川建治委員、江成敬次郎委員、大草芳江委員、 岡本あき子委員、高野秀策委員、西大立目祥子委員、増田聡委員、 間庭洋委員、宮原育子委員、柳井雅也委員 [11名]
欠席委員	大滝精一委員、小野田泰明委員、菅井邦明委員、鈴木勇治委員 [4名]
仙 台 市	企画調整局長、企画調整局次長、総合政策部参事、総合計画課長、総合計画課主幹（2）
次 第	1 開会 2 部会長選出及び部会長代行指名 3 議事 (1) 部会の運営に関する事項について (2) 基本計画の素案について (3) その他 4 閉会
配付資料	資料1 都市の魅力部会委員名簿 資料2 都市の魅力部会の運営について（案） 資料3 基本構想・基本計画の全体構造とコンテンツ 資料4 基本計画（骨子案） 資料5 人口フレーム（素案） 資料6 持続可能な都市空間づくり（素案） 資料7 分野別計画の体系（たたき台案） 資料8 まち歩きフィールドcafe（参加募集ちらし）

会議の概要

部会長選任及び部会長代行指名

- ・委員の互選により、宮原育子委員が部会長に選任された。
- ・宮原育子部会長の指名により、間庭洋委員が部会長代行となった。

議事

(1) 部会の運営に関する事項について

- ・事務局から資料2を基に説明し、資料2記載のとおり今後進めていくことについて委員から了解を得た。

(2) 基本計画の素案について

- ・事務局から資料３～７を基に説明し、その後意見交換を行った。

< 主な意見等 >

- ・資料５で人口のピークは2012年となっているが、以前の新聞報道では今年がピークとされていた。２年のずれをどう考えたらよいのか。

昨年報道された推計値は当時の人口データを基にしたものだが、今年３月の流出入口が例年の半分となるなど、ここ１、２年の動きが従前の統計的な推計と違ったものになっているため、直近のデータを使って推計し直したものを今回示した。

- ・甘い人口見通しがいろいろな失敗を引き起こしているのので、人口減は自明のこととして、シビアに見ていただきたい。
- ・人口については、仙台のポジションを考えると、行政区域や都市圏だけでなく、東北全体とか東北南三県などのエリアの広域的な社会移動というものもまた視点に入れてみていく必要がある。
- ・都市のイメージを想像しながら説明を聞いたが、この計画を本当に推進していくと、仙台の中心部が人のいない殺伐としたようなまちになってしまうのかと心配になった。新産業の立地として青葉山や卸町を想定していると思うが、やはりまちの中にも誘導する必要がある。産業があって商業というのが成り立つので、中心商店街の問題としても考える必要がある。
- ・東西線の東の終点の荒井地区で区画整理が進められているが、人口減少の予測の中で宅地は供給過剰だと思うので、都市型産業の誘致などの土地利用も考えるべきではないか。
東西線という新たな仙台市の骨格軸にできるだけ人口を誘導して、人口の集積をある程度一定地区に図っていき、それによってできるだけ多くの人と同じようにサービスを受けやすいような状況をつくるというのが一つの都市の使命だと思っているが、都市型産業などの誘致、育成も図っていく必要があり、市内部でも関係部局と協議をしているところ。
- ・機能集約型という一方で、逆にまだら化する地域課題に対応していこうとしているが、みなさん自分の地域が発展することを望むので、地域課題を積み重ねていくと、すべての地域で発展していきましようという形になってしまうおそれがある。10年後を見据えた中では、さらに人口増が進むであろうエリアに対する施策の一方で、どうしても人口が減らざるを得ないあるいは急激な高齢化がさらに加速するであろうエリアには新たな投資がなかなかもうできないということも明確に出さないといけない。そこら辺をきっちりと区別をして、新たな投資はできないけども既存の施設なり既存の資源を活用していかに生活を維持していくか、あるいは人口の移動、誘導をするとかいう施策がここ10年でまさに求められると思う。すべての地域に明るいう未来がありますよではなく、申しわけないがここは厳しくなるけれどもこういう形で力を維持していただきたいとか、そういうことをある程度提言せざるを得ない。
- ・人口フレームにはかなり不確実な要素がたくさん残っているので、少し幅をもった計画フレームの見方も必要ではないか。また、財政フレーム及び産業フレームを設定して、真剣にそこと連動させるという総合計画のやり方もあるかと思う。
- ・まだら化する地域課題という議論が出ているが、それぞれのセクションの方は、宅地開発の動向、高齢者団体の動向、学校の不足の問題など、それぞれの部分としては把握していると思う。先ほど指摘のあった中心部空洞化の実態も含め、このまだら化している実態を経年的に把握し、

なぜそういうことが起きているのか、想定範囲内なのかそれとも新しく考慮すべき課題が起ってきたのかとかいうことを、計画を動かしながら１年ごとぐらいにモニターする仕組みも組み込んでおけば、どこかで舵を切り直すとか、こちらの方向にさらにシフトしていくというようなことが計画期間中にもやりやすいのではないかと。

- ・仙台市全体の人口予測をしているが、ゾーンでの人口の変動など、もっと細かいところで予想ができればいいと思う。消防局でハザードマップをつくっているが、基本的に危険地域には長期的なスパンでみると人が住まないようになっていった方がベターだという考え方があり得る。それは10年でできる話ではないが、その準備をどう進めていくのかという長い目でまちづくりも合わせて人口の問題を考えるべきなのではないかと思う。10年間で必ずこういうことをやるという確実なことはそんなに多くはないのではないかと、もう少し次の10年、20年を見据えるための準備期間という要素があってもいいのではないかと思う。

- ・(資料3の)基本計画の理念と視点のところに都市計画的な言葉しかないというところが、とても気になった。市民に対してこういうまちをつくっていきますよと提示するものでありながら、一体市民の生活が10年後にどういうものであるのかというところが、この理念からはよく見えない。コンパクトシティを目指すのは分かるが、都心に住みながら緑を感じたり風を感じたり歴史ある雰囲気を実感したり、そこで働いて家族が暮らすという、その多様な要素を都心にどうつくっていくかという辺りのことがないと、ただの機能論に終わる総合計画になってしまうのではないかと懸念した。

(資料3の)設計図はまだまだ熟度が低いと認識しており、ご指摘はもっともと思う。推進体制として、分かりやすい目標設定をするとか、市民協働による評価手法を検討するなどを考えている。市民生活がどうなっているかといった指標を設定し、市民力をどう評価していくかということも市民生活の向上に大きく貢献していく断面になろうかと思うので、その辺を含めてご議論いただきたい。

- ・人口に関して、中心部への回帰が始まっているという話もあるが、ついこの住みかとして郊外の団地に住宅を求めた方たちが街の中に改めて移動しようとか、あるいは郊外団地の空いた部分に新たな家族を入れようなどといったことはそんなに簡単にいくものではない。人口の総数だけでなく、年齢などの構成が大切であり、納税する世代はどう考えるのかといったことを見ていく必要がある。選ばれる都市と言ったときに、これから新たに将来に市民を多く回帰させていく条件をどうつくっていくのかということが非常に大きな影響があると思うので、その辺はしっかり見る必要がある。
- ・コンパクトシティにおける交通の問題では、都心に集約していくということよりも、郊外の団地に住んでいる人たちを生活に必要としているものにつないでいく交通体系をどうつくっていくのかというのが非常に重要。もうからない路線は切り捨てていくということではなくて、きちんとその生活が成り立つ足をどう確保するのかということを考えなくてはならない。(資料6の図2)都市内交通体系のイメージというところで非常に強調されているのが、フィーダーバスは団地から地下鉄に人を運んで地下鉄を利用してそれぞれのところに行ってもらおうというのが基本になっており、これは生産年齢の方たち、いわば通勤、通学で朝必要な時間帯に非常に有効だと思うが、一方で高齢者の方々などは、このフィーダーだけでは生活が成り立たない。団地間をつないだり、あるいは病院とか商店街とかをつないでいくといったメリハリ

をつけて市民生活の足を確保することによって仙台版のコンパクトシティというものを描いていく必要がある。

- ・コンパクトシティという言葉について、全部真ん中にもってくるという話で使われたり、交通体系を中心としたコンパクトシティという意味で使われたりしているが、議論が混乱しないためにある程度定義づけしておく必要がある。
- ・先ほど指摘があったが、市民力という問題が視点の中にうまく組み込まれていないと私も感じている。市民力というものは本来多面的にとらえられるもので、経済活動における一人一人の起業力も一つの市民力だろうととらえている。この文章を読んだ限りでは、学びサークルをたくさんつくっていくような感覚で、学びを通じて地域の経済や財政収入に貢献してくような産業的な要素としてのとらえ方が希薄な感じがする。視点をもうちょっと多面的にしておいた方がよい。
- ・仙台市民としてずっとここに住んでいる割には、なかなか自分たちの足元というか地域に対して目が向かなかったが、今、起業して取材活動やイベント主催をする中で、仙台には要素というか資源というか価値あるものが一杯あるんだなということを実感している。先ほど市民力の話があったが、まず住んでいる人が自分たちの地域にこういったものがあるのか見えるようにするだけでも、かなり違うのではないかな。
- ・仙台には海から山までであるが、海の視点が無いのではないかと資料を見て感じた。
- ・人口について、数だけではなく、階層的なものの質的なものといったものも意識する必要がある。
東北における仙台は人口が全体として下がっていく中でも、その地域における拠点性の高いところで働くとか、学ぶというのを求めて来る人がある一定のシェアでいる。どういう人たちが、そこに集まってきて暮らし、住むのか、あるいは働くのかという想像と、それから東北が5年、10年先どんな状況になっているのか、その関係において仙台の都市の魅力あるいは産業、就労の場も含めた役割として見えてくるものがあると思う。特に東北が、もし想像以上に疲弊していった場合は仙台で就労を求める方がどんどん入ってきて、失業者数は増える可能性があるというロジックがあり得る。そういったことを想定して集約的市街地化をどうするかとか、交通をどうするかとか、それから都市の魅力をどうするかということを考えていかないと、見誤ってしまう可能性もある。仙台はどういうふうに動いていくのかということについて、人口の数だけではなく、階層的なものの質的なものも意識した課題をご指摘いただければ都市の魅力についてもっと深い議論ができる。特に市民力といったものは、後5年か10年したら仙台市民の今の方々が相当入れ替わっている可能性があり、そういったときに市民力を永続的に形成し続けていくのはどういうことなのかということも理念がちょっと変わっていく可能性があると思う。
- ・それぞれの地域でそれぞれの事情によって、いろんな方たちが移動されているという状況があり、そういった東北の全体の社会の変わり方の中で、今仙台をどうみるかという視点を持つというのはやはり重要なところ。それから都市の魅力としては、例えば外国人の観光客の方や、いろんな会議でいらっしゃる方とかが多様になってくると思うが、そのときの仙台はどういうふうにあるのかということも、もう少し考えた上で各論をもうちょっとみんなでイメージした上で、こういった設計図の上に載せる言葉をしっかり選んでいくという逆の方向の考え方も必要なのかなと思う。

- ・資料6のゾーニングの仕方がちょっと大雑把過ぎるのではないかと。目指す都市の形というよりは現在の土地利用の感じなのではないか。成熟社会にそれぞれの地域がどうあったらいいかと考えると、もっと目の細かさがないと魅力は輝かないし、引っ張り出せないと思う。単純に市街地を三つに分けているが、都心の集積度が高いところと、それから都心の際のところとか、あるいは市街地との農村地域の際のところとかそういうところにいろんな問題、景観的な問題や、その住まい方の問題が発生しているのではないかと。こういうところをもっときめ細かく拾っていくことが、後にぶら下がっている細かい体系の言葉を豊かに、内実が伴うものにしていくのではないかと。
- ・(資料6の)都市空間構想図は、全体として山から海までこういう空間構成を担っているというのを伝えたい図だと理解しているが、まだら化する地域課題ということで言えば、そう今のそのフリンジ部分との話、都市、農村の際の話、というところが典型的にまだら化している部分であり、そういう地域を取り上げるということと言うと、まだら化している問題地域のゾーニングを別途描けるかというのが、大きな課題としてあるかと思う。
- ・資料7の「自然と調和する持続可能な環境都市づくり」と「美しく魅力ある都市景観・空間づくり」では結構重なっている部分があり、一本化してもいいのではないかと読んで読ませていただいた。
- ・ゾーニングについて、郊外区域が単純にすべてが薄い黄色で染められているが、一戸建てが多い地域で30年経ったら明らかに高齢化世代になるなど、それぞれの課題に合わせて、郊外区域の中でもさらに明確にしてはどうか。
- ・(資料7の)公共交通中心の項目の中で、道路整備について「優先順位を明確にし、効果的に整備を進める」と書いているが、効果的な整備を進めるというよりは、もう一度新たな今後の10年をあるいは2050年を見据えた上で必要な交通体系をきちんと明示していくなど、何となくやっぱり進めるんですね、というよりもある程度きっちり見極めますということがあっていいなと思っている。また、もっと自転車を活用していくまちづくりというのが一つあっていい。自転車の利便性を高めるけれども、歩行者中心というフレーズになっているので、歩行者は歩行者で一つ、自転車を活用していく環境にやさしい交通ということも、仙台ならではのうたってもいいのではないかと。
- ・知識集約型産業、金融、新しい対事業者サービスなどの都市型産業は、三大都市圏が6割から8割くらい占めている場合が多く、残りのシェアを地方圏が争うという構図になっている。この計画でいくと一見バラ色のように、都市型産業の受け皿をつくれれば来てくれると思うかもしれないが、実は難しいだろうということを実感している。知識集約型産業が張り付くには、特定の役割を持ったものや地元のマーケットが対応するものなどに限定されてくる。まだ人口は急激に減るところまでいかないこの10年間で勝負どころであり、都市型産業ということの一つの錦の御旗にして産業活性化ということを考えていく場合は、この10年間にいろんな経営資源を投入していただきたいと思う。人口が減るとこういうサービス産業とか知識集約型産業というのは必ず衰退し、フェーズが変わってしまうので、都市型産業をやるとなったらこの10年でやり終えることを覚悟しておいた方がいい。

(3) その他

- ・事務局から資料 8 について説明した。
- ・来場者から、都市の魅力とは何なのかということについて、もっと具体的に話を進めてほしかったという意見が出された。